

# 知識の旅

## 近代科学小説の中の宇宙旅行

潘 少瑜

(訳 石田卓生)

### はじめに

清朝末期、列強の侵入と地理学的知識の拡大は、中国人の空間概念に大きな衝撃を与えた。林則徐（一七八五—一八五〇）の『四洲志』（一八四一年）、魏源（一七九四—一八五七）の『海国図誌』（一八五二年）等の書籍、清末の海外駐在使節の日記や文人の旅行記<sup>1)</sup>、新聞雑誌による紹介のほか、さらに翻訳小説の生き生きとした描写が、中国人の「異境」に対する想像力と好奇心をかき立て、「旁諮風俗、広覧地球」（かの地の人々の暮らしをよく見て、広く世界を見渡す）という筆致を通して、当時の人々のグローバルな意識を押し開き、清末小説にも影響を与えたので

ある<sup>2)</sup>。ある研究者は、清末小説が「異境」を科学文明によって測られる新しい空間体系の中に置いたことよって、伝統的な「異境」が持つ神秘的な色彩が変調し、現代性を具えた寓意空間が成立したと指摘する<sup>3)</sup>。そのように見ると、西洋天文学の知識が伝播した後の清末の宇宙空間は、当時の人々に言わせてみれば、神秘的色彩と現代的性質を兼ね備えた新しい「異境」であった。それは果てしなく広大で、人々の想像をかき立て、その上、新しい科学機器による観測によって清末小説の登場人物の「壮大な旅」がいずれは実現可能になると思われるっており、それゆえ小説にとって格好の舞台となったのである。小説の主人公たちは太陽系を舞台に未知の世界を縦横無尽に探検するばかりか、惑星に植民して宇宙の覇者となることさえあった。

もし地上を離れ空に昇り、宇宙を旅行するならば、必ず何かしらの方法で飛行することになるが、それは陳平原が「清末の幻想的意味を帯びた小説には、往々にして飛び回るイメージが出現し、それを『科学』の力のシンボルとしている」と述べたものである。そうであるから、近代に創作されたり、翻訳されたりした科学小説に描かれる宇宙旅行の方法からは、作家たちの「科学」についての基本的な認識のありさま、また小説の叙述と科学知識との間の引っ張り合いを見いだすことができるのである。筆者が見た限りでは、清末民初に翻訳された科学小説の中で宇宙旅行に関係するものは、素子（魯迅、一八八一年一九三六）訳のジュール・ヴェルヌ（Jules Verne, 1828-1905）『月界旅行』（一九〇三年）、木村小舟（一八八一年一九五四）著、茂原築江（生没年不明）訳、王本祥（生没年不明）監訳「蝴蝶書生漫遊記」（一九〇三年）、商務印書館の翻訳によるヴェルヌ『環游月球』（一九〇四年）、愛克乃斯格平（本名、生没年不明）「幻想翼」（一九〇五年）、周桂笙（一八七三—一九三六）訳「飛訪木星」（一九〇七年）、蔣景緘（生没年不明）編訳『火星飛艇夢』（一九一五年）等、少なくとも六点がある。創作作品では、荒江鈞叟（本名、生没年不明）『月球殖民地小説』（一九〇四—一九〇五年）、徐念慈（一八七五—一九〇八）『新法螺先生譚』（一九〇五年）、陸士諤（一八七八—一九四四）『新野叟曝言』（一九〇九年）、

熊叔恒（熊十力、一八八五—一九六八）と何見田（何自新、一八八一年一九四四）『地球末日記』（一九〇九年）、利言（本名、生没年不明）、塵父（許塵父、一八九一—一九五三）共著「七星遊」（一九一八年）の五点がある。これらの科学小説は西洋の天文学知識に触れていたり、あるいは作者自身の奇怪な想像と天文学知識がいまぜになっていたりしている。西洋の天文学は長い歴史を持つが、一九世紀から二〇世紀にかけて、大型で精密な望遠鏡の改良、天王星と海王星の発見、火星人や月人についての風聞、彗星が地球に衝突するという予言等によって、当時最も注目される科学分野となっており、インテリたちは大衆の注意と討論を喚起していた。二〇世紀初頭、翻訳されたり、創作されたりした宇宙旅行に関する科学小説は、当時最も関心を集めていた話題を反映していたのであり、作家たちの先端科学技術や人類に対する過激なまでの大胆な想像を体現化していたのである。近代の宇宙旅行に関する科学小説では、一体どのような科学的観念が伝えられたのだろうか。その教育的意義は何だったのだろうか。その知識体系ははつきりとした時代的特徴を具えていたのだろうか。天文学の知識と小説の叙述との間にはどのような引っ張り合いがあったのだろうか。清末民初の作家は流行の天文学知識やイデオロギー、小説の叙述をどのようにつなぎ合わせ、「国民的寓話」(National Allegory) あるいは帝国

主義的色彩を帯びた宇宙探検を紡ぎ出したのだろうか。これらが本論の考察する問題である。

## 一 天文学と人文学の交差するところ

古代中国では「天」を神聖で崇高なものだと見なしていた。「天文」は「人文」との間に密接不可分な関係を有しており、すなわちこの世界のさまざまな現象は、すべて太陽や星々、星系の並び方や運行秩序と相呼応し結び合っていると考えられていたのである。こういった縦方向の「天人」の結びつきというのは、連綿と守り継がれてきた中国一千年の文化の揺るぎなき礎であるとも言える。長い歴史を俯瞰してみると、この安定した構造は、明末の宣教師マテオ・リッチ (Matteo Ricci, 1552-1610)、『アダム・シヤール (Johann Adam Schall von Bell, 1591-1666)』等が「地円説」「太陽中心説」「地動説」等の天文学理論をもたらしたことにより、最初の大きな挑戦を受けることになった。士大夫たちの中で保守的な者は言うまでもないことだが、たとえ進歩的な思想の持ち主であったとしても、そうした「天地がひっくり返る」ような道理に背く説を受け入れることは難しく、士大夫の激しい反駁を受け、西洋の天文学は中国ではしばらく影を潜めることになった。しかし、清朝も半ばを過ぎると、西洋の天文学知識が大量の翻訳によって流

入し始め、天体観測機器による観測データを動かすことのできない証拠として、天文学者は事象一つ一つを証明するようになった。さらに自強運動以降、インテリ層が科学技術の発展を早急に実現させようと、天文学に関する書籍を積極的に紹介し、また多くの宣教師が執筆した一般向けの天文学の読み物によって、中国の読者に最新の西洋天文学の知識が紹介されることになり、中国の伝統的な思想である「天人」連結構造に大きな打撃を与え、あまつさえその影響は日増しに深まり、終には完全に転覆させられてしまったのである。ここに至って、「天」は不可侵な存在ではなく、観察、測定される実在するものとなり、「人」と「天」との関係にも激しい変化が起きたのだった。

清末の翻訳による西洋天文学知識の紹介には、ベンジャミン・ホブソン (Benjamin Hobson, 1816-1873) 『天文略論』、『アンドリュース・P・ハッパー (Andrew Patton Happer, 1818-1894)』『天文問答』、『魏源』『海国図誌』、『王韜 (一八二八—一八九七)』、『アレクサンダー・ワイリー (Alexander Wylie, 1815-1887)』共訳『西国天文学源流』(一八五七—一八五八年)、『アレクサンダー・ワイリー』、『李善蘭 (一八一〇—一八八二)』共訳、『ジョン・ハーシェル (John Herschel, 1792-1871)』、『イギリスの天文学者』著『談天』(一八五九年)、『*Outlines of Astronomy*, 1849』、『ネイサン・サイツ (Nathan Sides, 1830-1895)』訳『天文浅説』(一八七〇年)等の「新

学」の書籍以外にも、さらに大量の新聞雑誌の文章によるものがあつた。清末の新聞雑誌である『察世俗每月統紀傳』『東西洋考每月統紀傳』『万国公報』『中国教会新報』『新明叢報』『益聞録』等は、「天文地理」「天文易知」「天文略論」「天文総論」「天文図説」「天文叢談」といった類いの文章を頻りに掲載しており、その総数は二〇〇編を上回っている。これら新聞雑誌の文章が流布した範囲は広範囲だった上に、その文章は比較的短く簡明で分かりやすかつたことから、それらが伝える知識を読者は容易に理解することができ、天文知識の普及に極めて大きな貢献をしたのだつた。特に注目すべきは、そうした文章の書き手の多くが宣教師であり、掲載された新聞雑誌も往々にしてキリスト教の背景を持つていたことである。例えば、天文学理論の周知啓発に大きな役割を果たした『談天』の訳者の一人アレクサンダー・ワイリーはイギリスの宣教師であつた。彼は序文の中で創造主である神の「全知全能」を褒め称えつつ、自身と李善蘭がこの書を翻訳した目的を「創造主たる神の大いなる力を人々に知らしめるためであり、遠く天空を観測させ、それによって人々が内省し自己修養に努め、神が定められた常道を逸しないようにし、そのようにして報恩させ善に導こうとする」というものであると述べている。また、王韜、ワイリー共訳「西国天学源流」は、冒頭で次のように概要を述べている。

天文学は、古来より特異なものである。人間を地球のはるかかたに導き、万物の理をつぶさに考えさせ、想像力を拡大させる。地球の外の世界を観測することによって、人間の想像力を極限まで拡充させ、数多の惑星の大きさや質量、彗星の軌道を測定することによって、星の膨大な量や宇宙の果てしない広さを人間に知らしめるのである。それによって人間は創造主たる神の全知全能を理解するし、また人間が天と地の間のささやかな存在でしかないことを理解するのである。

同じような考え方は、当時の天文学を紹介した書籍や文章の中に必ず目にすることができるものである。宣教師から見れば、天文学はキリスト教と補完し合う関係にあり、宇宙の星空の恒久的秩序は、全能たる神の存在と英知を証明するものなのである。さらに、遠く天空を観測する科学的な姿勢と内省し自己修養に努める倫理的な自省も表裏一体なのである。しかし、そのような宗教的態度は、多くの近代科学小説には欠如しており、人類の比類なき自信がそれと入れ替わっている。ドイツの思想家ハンナ・アーレント (Hannah Arendt, 1906-1975) がガリレオ・ガリレイ (Galileo Galilei, 1564-1642) の望遠鏡が人類世界にもたらした衝撃について述べたように、新しい道具によって人々は、「人間は地球に居ながらにして、宇宙の視点から考え

たり、さらに観照したりすることができる不思議な能力を持ち、そこから宇宙の普遍の原理を地球での行動基準にする<sup>⑨</sup>ことに気づいたのである。近代の天文学の知識が人類に与えたのは、広大な視野、欲望の競い合う戦場の二つであった。ジュール・ヴェルヌ『月界旅行』(De la Terre à la Lune, 1865)の中の登場人物J・T・マストンは次のように言っている。

星々を創られたのは創造主たる神です。砲弾を製造するのはわれわれです。創造主たる神が電気や光、風の速度を勝ち誇っておられるのですから、われわれは砲弾の速度が疾走する馬や自動車の数百倍であることを誇るべきではないでしょうか。まして、秒速七マイルで飛行する新型の砲弾が、月世界へ出発するのですから、なんて名誉なことなのでしょう<sup>⑩</sup>。

マストンは、創造主たる神と人類とは競合関係にあると考えている。前者は星々を創り、後者は砲弾を製造し、両者とも自身の成果を誇っている。人類が月にたどり着く砲弾を発射しようとするのは、天の神様と勝負を争うというよこしまな心理によるものなのである。

近代科学小説の世界の中で、宇宙の不思議な神秘は必ず宗教の神聖な雰囲気を帯びているのだが、人類が宇宙を探

索するのはただ好奇心や征服欲を満足させるためだけであって、広大な宇宙のただ中で自分の存在の小ささを再認識したり、あるいは創造主たる神の「全知全能」を証明したりすることではなかった。近代科学小説の登場人物は、中国の伝統的な縦方向の「天—人」構造という觀念に制限されることなく、宇宙の星々は彼らにとつて、観測し探索するものであり、甚だしきに至っては移民したり、征服したりする対象なのであった。「天」と「人」との関係はますます疎遠となり、星回りはもうこの世の吉凶禍福を反映することはできず、「人」の「天」に対する畏敬の念も漸減していったのである。まとめると、清末民初の小説家は新聞雑誌の文章から西洋天文学についての一般的な知識を吸収していたが、その背景にあるキリスト教的なイデオロギーの影響はほとんど受けていなかった。しかし、見知らぬ惑星を鏡像として中国の政局や社会を批判していくことは、宇宙旅行小説の中の「天文」を「人文」で覆い隠してしまうことにほかならず、つまるところ、それは清末の政治小説や譴責小説と同じであった。

## 二 星空を飛ぶ方法

科学小説において、科学知識をどのように小説の叙述と結びつけるのかということは、創作者にとつて難題であ

り、研究者が関心を抱く問題でもある。<sup>(1)</sup> 魯迅（二八八一—一九三六）は自身が翻訳したヴェルヌ『月界旅行』（一九〇三年）の「序文」で述べている。

思うに科学について言い立てるだけでは、普通の人は飽きてしまい、最後まで読むことなく眠たくなってしまふものである。かといって無理強いするのはとても難しいことだ。しかし、小説の力を利用すれば、詳細な分析であつても、自然と頭の中に染み込み、うんざりすることはない……学問上の理論を集めたものであつても、堅苦しくなく、ユーモアに富んでいれば、繰り返し考えさせる手間を取らせることなく、読者に理解させることができる。知らぬ間にいくらかの知識を得させ、古くからの迷信を打ち破り、思想を改良し、文明を補助することができるのだ。小説の優れた力というものは、こういうものなのである。<sup>(2)</sup>

魯迅が設定した前提とは、科学とは難解かつ無味乾燥なもので、普通の人は全く興味を覚えず、ただ小説のユーモラスな表現だけが、読者の知識吸収の手助けをすることができ、さらに進んで「思想を改良し、文明を補助する」というものである。言い換えれば、科学的内容は必ず小説という形式の助けを借りなければならないということであ

る。もし小説という衣をまとわなければ、誰も科学知識を手をつけようとしないのである。問題なのは、「繰り返し考えさせる手間を取らせることなく」、つまり思索することなく得たという知識に本来の価値があるか否かということである。もし作家が心血を注いで書いた科学小説が「いくらかの知識」を得させることでしか読者に貢献することができないのであれば、科学をモチーフにした小説の価値というのは実際のところ「科学」にあるのであつて、「小説」にはないということなのだろうか（しかし、私たちは小説という形式の重要性をたつた今証明したばかりではないか）。「小説」の部分がどんなに巧みに書かれていようと、それは「科学」のためだけなのだろうか。それに科学小説の中に本当の「科学」の成分があるならば、その知識はいつたほどの程度まで深く正確にすることができるのだろうか、それは小説の面白みに悪影響を及ぼすことはないのだろうか。あるいは、物語の進行を自然なものにするため、作家が科学知識をいい加減に持ち出し、誰でも知っている簡単な原理だけでごまかすことはないのだろうか。近代に創作されたり、翻訳されたりした科学小説から、私たちが目にするのは、「科学」と「小説」との奇異な関係である。それは特に宇宙旅行に関する作品に顕著に見られるのである。

科学小説が読者を引き寄せた要因の一つは、それが豪放

飄逸であるにもかかわらず情理にかなっており、話の辻褄が合っていたからである。宇宙船がまだ実現していない清末民初の時期に小説家たちが描いた宇宙旅行というのは、不可能なことを可能にしようとするある種の試みだったのである。当時の新聞雑誌『科学世界』『大陸報』『新民叢報』『政芸通報』等は、「星球相通之証明」「水底行船」「空中戦具」「空際行舟」「潜水水電之發明」「新式空中飛行船」「地球與火星通訊」等、各種の新たな發明や学問上の原理、理論を常に紹介し続け、中国人作家の好奇心を刺激し、彼らの空想科学の世界の礎を構築した。一九世紀末から二〇世紀初めの人々は、科学發展の将来性に確信を持っており、例えば、著者不明の「論科学之發達可以闢旧小説之荒謬思想」（一九〇六年）は、小説家の奇異な想像は、結局のところ科学研究を通して実現することができるのだと強調している。

わが国で荒唐無稽であると一笑に付されているものも、科学的なアプローチを採ることによって、最終的には目的を達成することができる。空中に上がる気球は哪吒太子が乗る風火輪のようであるし、レールを疾走する機関車は戴宗の走るのが速くなる神行法のようである。……海底旅行、地底旅行という新發明は土行孫の地中を泳ぐように進むことができる土遁法のものであるし、音

声を記録した蝸管を回して音を出す蓄音機は殷七子の留声術のようである。これからは、譚嗣同が言うところの月の遠心力を弱めて地球に接近させるといった電磁気学と気象学にまたがる新理論も出てくるのであろう。唐の玄宗が月の宮殿に行き遊んだというおとぎ話があるが、それすら実現することができるはずなのだ。科学とは実に不思議なものである。

彼は科学の發展について極めて樂觀的であり、譚嗣同（一八六五—一八九八）が唱えた大胆な方法によって月旅行という夢を実現させることができると考えている。しかし、ここには作者の論理面での疎漏さがあらわになっている。たとえなにかの科学技術の發明が偶然にも小説家の空想と一致したとしても、小説家の空想がことごとく最先端製品に転換されうるということを示しているわけではないのだ。言い換えれば、「荒唐無稽である」と一笑に付されているもの「すべてが「科学的なアプローチを採ること」によって実現化できるわけではないのである。清末作家は科学小説にはなくてはならない科学知識について、ともすれば同じような心理状態を抱くようであり、ここでは非科学的な妄想による「未来科学技術」が科学と空想の合間に紛れ込んでいた。

近代科学小説の翻訳作品を見ると、作家たちはさまざま

な宇宙飛行の方法を思い描いている。例えば、ヴェルヌの『月界旅行』〔*De la Terre à la Lune*, 1865〕は冒険家に乗せた砲弾が巨大な大砲によって月へ向けて発射されている。<sup>15</sup>「蝴蝶書生漫遊記」の主人公は「創造主」と一緒に「風船」に乗って（飛行原理は分からないが）宇宙飛行している。この風船は薄い紙でできており、軽く褐色で、自由に折りたたむこともでき、広げると設備の整った大きな家にもなり、入り口の小さなボタンだけでとても小さく縮小することができる。<sup>16</sup>『火星飛艇夢』の主人公は、「あたかも大きな鳥のような、全体が赤色で、翼を具え、前部のプロペラを回して起こした風でも速く飛行し、腹部からはめらめらと燃えるような目もくらむ光線を発する」という新式の飛行艇に乗って火星を訪ねている。周桂笙が翻訳した「飛訪木星」の葛林士博士は、隕石に含まれる磁石の引力と斥力を利用して、鉄道客車を木星へと飛ばそうとするが成功間際に惜しくも失敗している。<sup>18</sup>「幻想翼」は最も特殊であり、作者が科学的な説明を全くしないまま、主人公の背中から「薄絹のような銀色」の「幻想翼」が突然生え、それによって宇宙を飛行し、月に降りたり、流星や彗星に行ったりして見聞を広め、太陽の表面を観察し、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星を訪れている。<sup>19</sup>科学小説の創作作品を見ると、『月球殖民地小説』の主人公・龍孟華の一家は気球に乗って月に遊学している。<sup>20</sup>

「地球末日記」は黄色人種が砲弾に乗り込んで金星に行くことを描いている（この描写はヴェルヌの『月界旅行』にインスピレーションを得ており、さらに作品で描かれた世界の最後の日の情景は、明らかに梁啓超（一八七三—一九二九）が翻訳した『世界末日記』（一九〇二年）に倣ったものである）。<sup>22</sup>陸士諤『新野叟曝言』の飛行軍艦は自艦で製造する空気によって宇宙を航行した。<sup>23</sup>徐念慈『新法螺先生譚』と、利言、塵父共著『七星遊』は宇宙飛行の過程に重点を置いているものの、飛行の原理についての説明はとても簡単なもので、あまつさえ粗略であるようにも感じられる。法螺先生は、エベレストの頂に立ち、魂を精錬した「不思議な光」を照射して全世界を明るく照らしたのだが、うっかり手を滑らせて魂を地面に落としてしまう。すると、その反動で大気圏を飛び出して月に衝突し、その後は水星や金星まで飛び、さらに太陽を数周してから地球に墜ちている。<sup>25</sup>この宇宙旅行の動力は主に弾力と惑星の自転である。<sup>26</sup>「七星遊」の作者の想像は幽玄で、飛行艇自体の重量が比較的大きく引力から逃れようがないため、飛行艇の固体はすべて気体に精錬されるとしている。それによって空気中に浮揚し、エンジンなど必要なく、ゆっくりと空中に舞い上がるのである。飛行艇に乗り込んだ乗客も気体化されて空に揚がるのだが、<sup>27</sup>さて身体はどのようにして固体になるのだろうか。気体化した後は、どのようにして固



体に戻るのでどうか。その原理を作者は次のように説明している。

人間の肉体は、チツ素、水素、炭素、酸素の四つの気体の化合物である。化合できるということは、分解もできるといふことだ。……神靈もまた気体だが、神靈は陰の気を帯びているため粘着力がなく、凝固することができない。人間は陽の気を帯びているので粘着力が強く、分解してもまた寄り集まることのできる。

作者は西洋の科学が発見したチツ素、水素、炭素、酸素を持ち出すと、漠然とした「化合」という言葉を使って人体の仕組みを適当に説明している。さらに「化合」するのであれば、当然「分解」もするというのである。作者はそうした空想科学の言葉を中国伝統の陰陽説に接ぐことによつて、鶴のような「科学」理論を作り上げたのだった。

以上、いくつかの作品を見てきたが、ヴェルヌ以外の近代小説家について言えば、飛行の原理や機器が科学的に妥当かどうかはさして重要ではなく、飛びたいと思ひさえすれば、どうであつても空へ飛び立つことができちゃつていた。王徳威は、清末の科学小説は「知識の枠組み(episteme)の転換を例示しており、言い換えれば、ある特定の歴史空間における(すでに獲得した、あるいは想像

された)知識の形式の総体的転換であり、必ずしも知識の内容面の飛躍とは限らない」と指摘しているが、科学教育の観点から見て、生半可な知識に科学的根拠を欠く空想を加えたところで、本当に大衆を啓発したり、国民を改良したりすることができると言えるのだろうか。小説が描く事柄について言えば、狂気じみた空を飛ぶ想像に本当の斬新さがあると言えるのだろうか。その時代のどのような焦燥感を反映しているのだろうか。また、どのような文学的伝統に対応するものであつたのだろうか。これらは今後も検討していかなければならない問題である。

### 三 星間旅行と宇宙植民

近代に創作されたり、翻訳されたりした科学小説で描かれる宇宙旅行のほとんどすべては太陽系内に限られたものとなっている。登場人物は太陽や月、水星、金星、火星、木星、土星、天王星、海王星(当時まだ冥王星は発見されていなかった)を冒険しているが、他の恒星系にはまだ行くことができなかったようである。翻訳作品を見ると、ヴェルヌの『環游月球』(Autour de la Lune, 1870)は三人の冒険家が砲弾に乗って月を周回する様子を精緻に描写する中で、月の山脈や湖、火山、遺跡を細かく列挙しており、まるで月の地理書のようにして読むことができるが、その

面白味は奇想天外な『月界旅行』(De la Terre à la Lune, 1865)には及ばない〔日本では『月世界旅行』の名で知られているが、本来は De la Terre à la Lune (地球から月へ)、1865 と *Around de la Lune* (月を回って)、1870 からなる二部作である)。正確な近代天文学の知識に基づく愛克乃斯格平の「幻想翼」は、少年・靄珂が白衣の娘・燐児に導かれて太陽系を旅することをテーマとしており、登場人物たちの問答を通して、読者に自然と新しい知識を消化させるものとなっている。こうしたスタイルは清末の新聞雑誌に掲載された一般向けの科学に関する読み物「天文問答」に似ている。それは当時の欧米ではすでに顧みられることとなった。それは教育スタイルであったが、中国の啓発的な新聞雑誌では当時よく見られたものであった。特筆すべきは、「幻想翼」の案内者役である燐児が、当時の天文学でまだ実証されていなかった理論については、「分からない」あるいは「知ることができない」と認める科学的姿勢を持っており、その他の科学小説のさまざまな夢想とは大きく異なっていることである。作品中、太陽と水星との間にある「惑星のような小さな球体」について、靄珂が「これは何ですか」と尋ねると、燐児は「全く分かりません。もし惑星であるならば、バルカンという名前のはずです。はつきりとは分かりません」と答えている<sup>33</sup>。ここで登場するバルカン(あるいは「火星星」とは、一九世紀後

半のヨーロッパの天文家たちが手を尽くして探していた惑星である。古典力学の計算による水星の理論上の運動と実際の状況には違いがあることから、かつて惑星軌道の計算をして海王星を発見したフランスの天文家ユルバン・ルヴェリエ(Urbain Le Verrier, 1811-1877)が水星の運動はまだ知られていない惑星、すなわち「火星星」の影響を受けているはずだと推測して、天文学界にこの新惑星探索のブームを巻き起こし、それは数十年後にアインシュタイン(二八七九-一九五五)が一般相対性理論を発表して「火星星」存在の仮説を覆すまで続いた。このように「幻想翼」の内容は一九世紀後半の天文学の研究を忠実に反映しており、作者の個人的憶測は入っていない。これと比較すると日本の作家木村小舟の「蝴蝶書生漫遊記」の方が面白く、想像力豊かな作品である。「蝴蝶書生漫遊記」の第三回から第五回にかけて、蝴蝶書生は「創造主」に付き従って荒涼たる無人の月を旅し、その後は火星に飛び、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星の代表者が集う大会に参加して、身長一〇里余りの木星人と炎を噴く星雲を腰に着けた土星人と知り合っている。その大会では、火星人主宰の下、太陽系の敵である彗星を討伐する遠征軍派遣が決議されている。「蝴蝶書生漫遊記」のプロットは妙趣に満ちており、当時の人々が月や水星、金星、火星、木星、土星、天王星、海王星について持っていた知識

を織り交ぜている以外にも、多くの動植物の知識や生物の進化や絶滅を紹介しており、楽しみながら学べる科学小説となっている。

中国の作家による創作作品を見てみよう。徐念慈の『新法螺先生譚』は壮麗かつ大胆で奇異な空想を呈しており、靈魂の姿になった法螺先生の宇宙旅行はいまだかつて誰もしたことがないものとはいえ、彼が行く先々の星で目の当たりにする事柄には、清末の民族的危機への焦燥感が反映されている。水星の驚くべき「造人術」は、「衰えた老人をたくましい少年に改造する」ことができるというものだが、明らかに梁啓超「少年中国説」（一九〇〇年）の「真人」を変化させたものである。金星の原始的な生き物に含まれている熱エネルギーというのは、悠久の文明を持つ中国人が熱を失って「変温動物」の地位におとしめられてしまったことを際立たせている〔当時、世界を席卷していた西洋人を恒温動物にたとえ、彼らに対して劣勢な中国人を変温動物になぞらえた表現〕。そのため、正確な天文学の知識は重視されておらず、徐念慈の関心は結局のところ清末の民族的危機にあった。別の作品を見ると、陸士諤「新野叟曝言」は夏敬渠（一七〇五—一七八七）の長編『野叟曝言』を揶揄したものである。物語は夏敬渠『野叟曝言』の続編となっており、主人公である文素臣は儒教化を推進し、仏教と道教を滅ぼすことで世の中が平和で豊かになる

と思い込んでいたが、それは急速な人口増、糧食不足、物価の高騰という危機をもたらし、惑星を植民地化することが人々の生活問題を解決しうる最も現実的な方法となっている<sup>③</sup>。陸士諤は冒頭で『野叟曝言』は「ただ人々を教え諭すだけで、人々を豊かにすることについては語っていない」と遠慮することなく欠点を指摘し、そうであるから『新野叟曝言』を著して、「前書の誤りを正し、そこで尽くされていない内容を拡充することで、夏敬渠の旧作を完全無欠の政治書とする」と述べている。これらから分かるのは、表面的にはS F性を発揮している『新野叟曝言』だが、結局は清末の政治や人々の生活を帰着点にしているということである。

民国初期の利言、廬父共著「七星遊」も、同じく想像力が豊かな作品であるが、正確な天文学の知識に基づいては書かれていない。この小説では、太陽系の惑星の住民や事物はすべて惑星の名前と関係があり、作者は字面で意味を暗示させる方法で読者の興味を惹こうとしている。例えば、金星は黄金の世界で、住民にとっては金よりも土の方が高価である。木星は一面に巨木が茂っており、住民は樹木に穴をうがち住んでいる<sup>④</sup>。こうした想像は、あるいは古代中国から伝わる金、木、水、火、土の惑星と五行説の觀念に由来しているのかもしれない。『史記』「天官書」には、「歳星」（木星）は「曰く東方の木は、春を主る」、「癸

惑（火星）は「曰く南方の火は、夏を主る」、「填星」（土星）は「曰く中央の土は、季夏を主る」とある。作者は主人公がさまざまな惑星で遭遇する驚きや危険を描くことによって、中国の政治や社会の混乱を風刺している。例えば、金星では犬や馬といった家畜のための学校が設けられていると聞いた主人公が、老先生にそれについて興味津々に尋ねたところ、老先生は、「この人は皆生まれながらにして学問があり、家畜も教育されている。この先にも学校があつて、鶏や羊が学んでいる。ここの禽獣の文化レベルは、地球の住民と大して変わらない」と答え、それに対して主人公は思わず、「先生は最近の地球人の物言いや振る舞いを見ておられないのですか。実際のところ奴らは禽獣にも劣っています」と言っている。政局風刺と国民性批判という面から見れば、「七星遊」は徐念慈『新法螺先生譚』の「科学で文飾した政論」というやり方を受け継ぎ、太陽系を旅する奇譚を創造した後、科学小説を「国民的寓話」とすることで、清末の政治小説や譴責小説と手法は異なるものと同じ効果を上げているのである。

清末の作家は夢の中で宇宙旅行をしていますが、当時強勢であった帝国主義と植民地主義を宇宙に投射することを忘れていなかった。例えば、『月球植民地小説』で、先進的な月の文明を目の当たりにした日本の科学者玉太郎は苦悶の言葉を漏らさずにはいられなかった。

世界は広大で、新奇なものに満ちている。……わが明治天皇が国力を振興したおかげで、わが国の臣民一人一人は勇気を奮い起こして突進し、南方では台湾を服従させ、北方では韓国を勢力下に収め、地球上の強国としての地位を占めるに至った。しかし、この強国という地位というのは、考えてみれば実に当てにならないものである。この小さな月だけを見ても、すでに文明は田畑にまで行き渡り、数年もたてば、われらの地球にやってくる植民地を開き、五穀を略奪することになるだろう。月でさえなおこのありさまなのだ。もし人口も文明もわれらより数千倍数万倍、あるいは計算できない程も勝る金星、木星、水星、火星、土星の五つの惑星と天王星、海王星と次第に行き来するようになったら、一体どうすればよいのだろうか。

上には上があるのである。明治日本の帝国主義は玉太郎の自省の中で、ただの夜郎自大なものとしてはかなく消えてしまっている。陸士諤の『新野叟曝言』は中国の王朝の姿勢を太陽系にまで広げており、描かれている木星の気候は地球の熱帯と同じようにひどく暑く、一面は黄金で覆われ、山もダイヤモンドだらけで、体が非常に大きい鳥類や獣、天に届かんばかりの原木があるが、そこが無住の地であることから皇帝は詔を下す。

臣民よ、若く丈夫で惑星への移住を願う者は、速やかに申請せよ。また、宇宙船建造の工匠を広く求め、皇室直属の宇宙船会社を設け、宇宙航行章程を定め、毎月二便の木星航路を開設する。<sup>(46)</sup>

皇帝は、さらに「征欧大元帥」文祢を木星総督に任じ、「木星のまつりごと」一切を適宜執行せよ。幕僚人事については、まるで「太陽の沈まぬ国」大英帝国の焼き直しである。皇室直属の宇宙船会社とはイギリス東インド会社のように強大な武力に頼んで巨額の利益を上げている。また暑く、土地が豊かな木星は、当然のことだがインドと同じで、宗主国に延々と経済物資を提供し続ける。清末小説家の「中国の夢」の中で、ヨーロッパ列強の植民地主義や欲しいものは何でも手に入れる覇者の姿というのは、一貫して羨望しつつ、做すべき目標なのであり、それは宇宙旅行小説においても同じであった。

## おわりに

清末民初に翻訳あるいは創作された科学小説における科学知識と小説の叙述のせめぎ合いは、多くの研究者が強い関心を寄せる問題である。本論は、宇宙旅行に関わる小説

を検討したが、ここでも科学と小説の奇異な関係が浮かび上がってきた。ヴェルヌの『月界旅行』と『環游月球』は科学理論を小説的な面白さに融合させた傑作であるが、大多数の中国の近代作家はそのレベルに達していなかった。彼らの科学小説は天文学用語が入り交じった政治小説、あるいは譴責小説なのである。西洋天文学の知識の伝播は、もとより近代の小説家に幅広い視野から地球を観測したり、太陽系を総覧したりできるようにさせたのであるが、登場人物の思考レベルは、やはり一九世紀後半から二〇世紀初期にかけて帝国主義が世界を席卷していたという現実の制限を受けていることから、富国強兵を目標とするものとなってしまっており、康有為（一八五八—一九二七）が自我を顧みて人間もまた「天」（宇宙）に浮かぶ地球という惑星に住む「天上人」であると唱えたような高度な次元に昇華するのは難しかったのである。そのため、宇宙の星々を巡る旅で、人々を驚かせるようなさまざまな情景をつづつてはいても、行き着く先はやはり現実の民族的危機とそれに対する憂患意識であった。

## 注

（一）著名なものでは、薛福成『出使英法義比四国日記』、曾紀沢『出使英法俄国日記』、王韜『漫遊随録』がある。

- 〈2〉 顔健富『從「身体」到「世界」——晚清小説的新概念地圖』台北：國立台灣大學出版中心，二〇一四年，一七三—一七七頁。
- 〈3〉 同書，三三—三五頁。
- 〈4〉 陳平原「從科普通物到科學小説——以「飛車」為中心的考察」吳岩主編『賈宝玉座潛水艇——中國早期科幻研究精選』福州：福建少年兒童出版社，二〇〇六年，一三七頁。
- 〈5〉 葛兆光「天崩地裂——中國古代宇宙秩序的建立與坍塌」『葛兆光自選集』桂林：廣西師範大學出版社，一九九七年，一〇八一—一〇頁。
- 〈6〉 例えば、『東西洋考每月統紀伝』は宣教師カール・ギュツラフ (Karl Friedrich August Gutzlaff) が創刊したもので、『中國教會新報』は宣教師ヤング・J・アレソ (Young John Allen) とウイリアム・ニューアヘッド (William Muirhead) が編集し、後に『万国公報』と改名したものである。『小孩月報』と『画図新報』はアメリカの宣教師ジョン・M・W・ファーンハム (John M. W. Farnham) が主宰していた。『益聞録』はキリスト教団体の機関誌である。
- 〈7〉 偉列亞力 (アレキサンダー・ワイリー)「序」、侯失勒原本、偉列亞力口訳、李善蘭刪述、徐建寅統述『談天』、『叢書集成統編』第七八冊、台北：新文豐出版公司，一九八九年，三二—四頁。
- 〈8〉 王韜、偉烈亞力共訳『西國天学源流』『六合叢刊』第一卷第五号、一八六七年。
- 〈9〉 漢娜・鄂蘭 (ハンナ・アーレント) 著、林宏濤訳『人的条件』台北：商周出版，二〇一七年，三六九頁。
- 〈10〉 儒勒・凡爾納 (ジュール・ヴェルヌ) 著、魯迅訳『月界旅行』、『魯迅訳文全集』第一卷、福州：福建教育出版社，二〇〇八年，一七頁。
- 〈11〉 陳平原「從科普通物到科學小説——以「飛車」為中心的考察」吳岩主編『賈宝玉座潛水艇——中國早期科幻研究精選』福州：福建少年兒童出版社，二〇〇六年，一五四—一五五頁。
- 〈12〉 魯迅「弁言」『月界旅行』、『魯迅訳文全集』第一卷，五一—六頁。
- 〈13〉 田若虹『陸士謬小説考論』上海：上海三聯書店，二〇〇五年，六六頁。
- 〈14〉 著者不明「論科學之發達可以闢旧小説之荒謬思想」『新世界小説社報』第二期，一九〇六年，七頁。按ずるに、同様の論点はほかの清末作家の文章にも見ることができ。例えば、包山 (包天笑) は次のように述べている。「科學小説は文明世界を先導してもいる。世の中には科學書を好まない者はいるが、科學小説を好まない者はいない。それは文明思想を導入するのに、最も速く効果的なものである。ある人 (ジュール・ヴェルヌ) が著した『海底二万里』では、イギリスのインテリが潜水艦を作っていた。別のある人が著した『空中飛行艇』では、フランスのインテリが空中飛行船を作り大西洋を横断している。この作品には毒ガス砲弾が登場しており、イギリス陸軍省が購入しているし、電話会議が開かれたり、ベルギー王妃

が宮殿に居ながらにしてフランスの大劇場の歌曲を聴いたりもしている。こうした例は枚挙にいとまがない」(包山「包天笑」『訳余贅言』、迦爾威尼(ジュール・ヴェルヌ)著、呉門天笑生訳『鉄世界』上海：文明書局、一九〇三年、一頁)。

〈15〉 儒勒・凡爾納、前掲書、五七―六〇頁。

〈16〉 木村小舟著、茂原築江訳、王本祥監訳『蝴蝶書生漫遊記』『科学世界』第八期、一九〇三年、五一―五二頁。

〈17〉 蔣影緘編訳『火星飛艇夢』上海：進歩書局、一九一五年、二―三頁。

〈18〉 周桂笙訳「飛訪木星」『月月小説』第五号、一九〇七年、五四―五八頁。

〈19〉 愛克乃斯格平「幻想翼」『繡像小説』第五三―五五期、一九〇五年。

〈20〉 荒江鈞叟著、董文成校点『月球殖民地小説』、『中国近代珍稀本小説』第四冊、瀋陽：春風文芸出版社、一九九七年、五三八―五三九頁。

〈21〉 熊叔恒、何見田共著「地球末日記」(『漢口見聞録』第四二〇号、一九〇九年九月二七日第二版)には、「水人を除けば、最も多いのは黄色人種である。この人種は、十萬年前、我らの『大同』思想を唱道し、世界中の砲弾と軍艦を溶解して大砲を一つだけ铸造した。弾の中に人が乗り込み、弾薬の力で空へと射出されて金星等に行つた」とある。

〈22〉 熊、前掲「地球末日記」には梁啓超訳「世紀末日記」と酷似する部分が二カ所ある。「地球末日記」の「於是以

最上之眼界、一瞥太空。萬有之形一切死、萬有之相一切死、萬有之聲一切死、萬有之色一切死。」(熊、前掲文、一九〇九年九月二七日第二版)と「既至地球、此十萬二人、以倏然物外之眼、遙望故郷、見無量家、無量族、無量部落、無量邦國、無量聖賢、無量豪傑、無量癡人、無量鄙夫、無量愛戀、無量憎惡、無量歡喜、無量悲愁、凡人類之所經營、所構造、其遺留於地球末日者、了無一物。於是黃人即從座起、而說偈曰：『一切有為法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀。』」(熊叔恒、何見田共著「地球末日記」『漢口見聞録』第四二一号、一九〇九年九月二八日第二版)は、梁啓超訳「世界末日記」の「彼以其倏然物外之冷眼、觀盡此世界無量家、無量族、無量部落、無量邦國、無量聖賢、無量豪傑、無量鄙夫、無量癡人、無量政治、無量學術、無量文章、無量技藝、乃至無量歡喜、無量愛戀、無量恐怖、無量殘酷、無量悲愁。一切人類所經營所構造、其得遺存於世界之終末者、惟此一物、惟此一物。」(梁啓超訳「世界末日記」『新小説』第一期、一九〇二年一月、一一―四頁)と「於時放最後之眼界、一瞥太空。萬有之形、一切既死。萬有之相、一切既死。萬有之色、一切既死。萬有之聲、一切既死。」(同、一一六頁)に似る。

〈23〉 作者は空氣を製造することによって、なぜ飛ぶことができるのかについては説明していない。あるいは、空氣には水のような浮力があり、十分な空氣を累積させると飛行軍艦を空中に浮かせることができると考えたのかもしれない。「文初は「私奴が風の揚がることについて考査いたし

ましたところ、鳥が飛ぶのも全て空気力でありまして、

それになぞらえて私奴が製作いたしました新しい機械は空の遙か彼方を飛行し得るものでございます。もしこれが実現いたしましたら、惑星間を行き来することも難しいことではございません」と言った（陸士諤『新野叟曝言』上冊、上海…亜華書局、一九二八年、七二頁）、「金演は「……われわれの艦は専らほかの星との連絡に用いられるが、そこにはいくつもの困難があると思う。第一に、地面から二〇〇〇尺も離れており、空気が薄く、船体が上昇できない」と言った。……文初は「二〇〇〇尺の空気の薄さも大丈夫です。空気は製造することができますから。……われらのこの艦は、地球を離れて星へ向かおうとしているのです。もし空気が製造できなければ、そこで自由に行動できますか。……惑星間を連絡するには宇宙をひっきりなしに行ったり来たりすることになります。わが艦の空気を頼みにしなければ、一体何を頼みにするのですか」

〔同書、七五―七六頁。』新野叟曝言』は稀観本であり、入手困難である。幸いにして林健群博士に快くご提供していただいた。ここに感謝の意を表します。

〔24〕「七星遊」が『小説季報』で発表された際、題名には「滑稽小説」の四文字が冠されていたが、その内容は主人公が太陽系の各惑星を訪れた見聞録で、そこに西洋の天文学の知識もちりばめられていることから、本論ではこれを科学小説であると捉える。

〔25〕徐念慈『新法螺先生譚』上海…小説林社、一九〇五

年、六一〇、二一一―三三頁。

〔26〕「私が観察していると、突然、私の体は渦巻きの中に巻き込まれてしまい、立っていられず、吸い込まれるように空に浮かび上がった。私は驚いて度を失った。それはヒマラヤ山脈から引力の中心点へと落ちる時と同じようなものであった。私はよくよく考えてから理解した。私が押し流された所は金星の南極点だったのだ。大抵の惑星は、自転する力によってさまざまな物質の根本の要素があちこちと動き回り、くっついたり分裂したりして、多種多様な動植物や鉱物ができあがる。物体ができあがっても、惑星の自転は止むことなく、物質の根本の要素も動きを止めることはない。つまり、すべての物体は進化し、それは永遠に止まることなどないのである」（徐、前掲書、三〇―三一頁）。

〔27〕利言、廬父共著「七星遊」『小説季報』第一期、一九一八年、九一―一〇頁。

〔28〕同書、一〇頁。

〔29〕「分解」の語は『新法螺先生譚』にも見える。「空气中に流れる物質の根本要素や不純物をたくさん集め、物質の根本要素同士、物質の根本要素と不純物、不純物同士を化合したり分解したりし続けられれば、どこでも元の姿に再現できる」（徐、前掲書、三〇頁）。

〔30〕王徳威『被压抑の現代性——晚清小説新論』台北…麦田出版、二〇〇三年、三三三―三頁。

〔31〕フランスの焦奴士威爾士著、日本の井上勤訳、商務印



書館編訳所重訳『環游月球』、一九〇四年。商務印書館版『環游月球』の三分の一は『月界旅行』の重訳であり、四〇頁以降が本当の『環游月球』である。

〈32〉例えば、露珂が、彗星の「尾」というのは一体何なのか」と質問すると、熒児は「誰も知りません。万物の中には、彗星の尾のように明らかにされていないものがまだあるのです」と答えている（愛克乃斯格平、前掲文、『續像小説』第五四期、六頁b）。また、露珂が木星から「太陽を見ると、小さくて光も弱い。木星の人は、きつと寒さに苦労しているのではないかと思う」と考えていると、熒児は「木星に人や生き物がいるかどうか、私は知りません」と言っている（愛克乃斯格平、前掲文、『續像小説』第五五期、一四頁a）。

〈33〉愛克乃斯格平、前掲文、『續像小説』第五四期、一〇頁a。

〈34〉Hsiang-Fu Huang, "Transferring Scientific Discovery to the Public: The Intramercatorial Planet Vulcan in 1860," *Public Understanding of Science*, vol. 26 (3), 2017, pp. 333-397.

〈35〉木村、前掲文、『科学世界』第一〇期、五一―七三頁。

〈36〉「この造人術は疑いなく私の理想である。人間の生存、運動、思想はすべて脳によるものであり、それを新しいものに取り替えれば、歯は再生し、曲がった背中は真っ直ぐになり、白髪は再び黒くなる。衰えた老人をたくましい少年に改造することができるのである。残念ながら私はその方法をまだ習得していないが、帰った後は資金を集め

て脳を改良する会社を上海に興そう。そうすれば上海で「艾羅補腦汁」（当時、実際に販売されていた滋養強壯保健薬）を販売している会社を瞬く間に倒産に追い込むだけではなく、わが国に深く染みついた悪習をすっかり入れ換えて、面目を一新させることになる」（徐、前掲書、二二―二三頁）。

〈37〉梁啓超「少年中国説」『飲冰室文集』第七卷、上海・広智書局、一九〇三年、一―五頁。

〈38〉「私は天地創造を信じている。熱して形を整えるため、その熱が生き物に具わり、原始生命体であつても手も焦がすような熱がある。最初の頃は、全てのものがそのようであつたが、特定の種族が繁殖すると、その熱は次第に分散した。このために地球で、早くに熱を失ったものが、変温動物になったのである」（徐、前掲書、二二五頁）。

〈39〉「人口は増えたが、土地は増えない。現在の状況から未来の世界を予測すると、土地が足りず、生きている者が生きられなくなり、母は子に乳をあげられなくなり、瞬く間に地球は飽和状態となってしまうが、どうしたらよいのだろうか。……私は詳細に研究し、天文観察をして、金星と木星の体積が地球の一〇倍であるばかりでなく、交通や通信の対策が可能であることが分かりました。そこへ地球の人々を植民させれば、人口が増えても何の問題もありません」（陸、前掲書、上冊、一一五、七二―七三頁）。

〈40〉陸、前掲書、上冊、二一―三頁。

〈41〉利、前掲文、『小説季報』第一期、一一―一三、二七頁。

- 〈42〉 司馬遷撰、瀧川資言考証、楊海崢整理『史記会注考証』第三冊、上海・上海古籍出版社、二〇一五年、一五一一、一五一八、一五二二頁。蔣景緘編訳による科学小説『火星飛艇夢』では、火星の人間や事物は、火のイメージをもっている。例えば、国名は「烈炎国」であるし、住人の頭髮は濃淡が一樣ではないが赤色である。
- 〈43〉 利、前掲文、『小説季報』第一期、一八頁。
- 〈44〉 吳猷雅「科学幻想與科学啓蒙——晚清「科学小説」研究」、吳岩主、前掲書、八五頁。
- 〈45〉 荒江、前掲書、五三二頁。
- 〈46〉 陸、前掲書、下冊、七五―七六頁。
- 〈47〉 同書、七六頁。
- 〈48〉 「白金、水、火、木、土諸星中、夜望吾地、其光華爛爛運行於天上、亦一星也。夫星必在天上者也、吾人既生於星中、即生於天上。然則、吾地上人皆天上人也、吾人真天上人也。人不知天、故不自知為天人。故人人皆當知天、然後能為天人；人人皆當知地為天上之星、然後知吾為天上人」〔康有為「自序」『諸天講』北京・中華書局、一九九〇年、一頁〕。

※文中の「」は訳者による。